



病を引き受けられない人々のケア 「聴く力」「続ける力」「待つ力」

石井 均 著

A5 頁 252 2015 年

本体 2,200 円＋税

[ISBN978-4-260-02091-6] 医学書院刊

評者 数間 恵子

前・東京大学大学院教授・成人看護学分野

本書は、『糖尿病診療マスター』誌に2004～2013年にわたって掲載された石井均氏による各界泰斗との対談から、特に氏の心に残るものが取り上げられ、まとめられたものである。対談は糖尿病とその治療あるいは関連領域にとどまらず、他領域の先達とも行われ、河合隼雄氏、養老孟司氏、北山修氏、中井久夫氏、中村桂子氏、門脇孝氏、鷺田清一氏、西村周三氏、皆藤章氏の面々が登場する。

対談では、各氏がどのようにしてそれぞれの領域を拓いてこられたかのライフストーリーが語られる中で、ヒトや社会をどう見ているかが示され、そこから、共通する糖尿病の人々への支援の核心に迫り、支援に求められる基本的態勢が浮かび上がってくことに気付く。糖尿病の人々、特に症状もなく、いわゆる古典的な苦痛症状を体験していない人々が糖尿病を自分のものとして「引き受けて」生きて行くことを支えるには、外的基準(検査結果の数値)による糖尿病学ではなく、「糖尿病医療学」が必要であり、その領域を拓き、確立することが急務であると説かれている。

「糖尿病医療学」の基盤になるのは、療養を要する人々がそれぞれ生きて創ってきた心、すなわちそれぞれにとっての意味を支えることにあり、その要諦は本書の副題が示す通り、「聴く力、続ける力、待つ力」であるとされている。話すあるいは語ることが保証され、他者とながり、その人の糖尿病と必要な療養行動についてのオーダーメイドの情報が伝えられることによって、意味の変化とともに必要な行動につながってゆくのだと納得される。糖尿病の人々に限らず、難治性の慢性疾患と生きる人々の心や行動を理解し、支援する上での基本的態勢として身につけるべきものであることが示されている。本書が最初と最後を心理臨床家との対談で構成されていることは、実際の順序以上に、その重要性を強調したものと読み取れる。

石井氏がその穏やかで相手がほっとする表情で各氏との対談に臨まれている様子が彷彿としてくるとともに、糖尿病の人々にも同様に接し、支えておられることが想像される一冊である。